

## GSIDの基盤作り

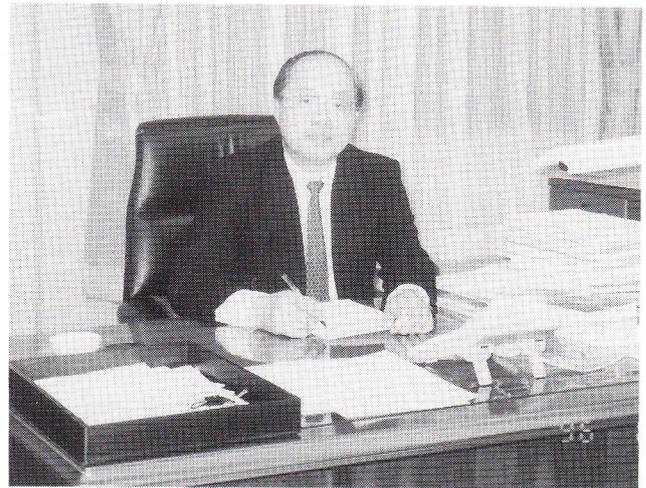
国際開発研究科長 森 薫 昭 夫

昨年7月ニュースレター第1号を発刊して、今回第2号を発行することとなった。第1号では、国際コミュニケーション専攻の後期課程設置によって当初の設置計画が完了した国際開発研究科に、新研究棟が建設され、ハードとソフトの両面で大学院としての形を整えた本研究科にとって、1995年は「国際開発研究科元年」といってよいであろうと述べた。

さて、研究科が新研究棟に移転してほぼ1年になるうとしているが、われわれは、研究科の元年にふさわしい活動をしたのだろうか。

まず第一に、研究科の情報システムがこの1年間で立ち上がった点をあげることが出来るであろう。昨年2月に新研究棟が研究科に引き渡された後、富士通のサーバーやコンピューターなど情報システムを組むために必要なハードが搬入され、情報処理室や各教官の研究室、院生室、事務室に必要な機器が配置された。しかし、松村教授をはじめとする情報委員会の関係教官の大変なご苦労にもかかわらず、一部機器やソフトの納入の遅れから、研究科全体の情報ネットワークシステムは、秋学期になって全面的に稼動を開始した。他方、インターネットによる情報発信については、佐々木助手の努力により、昨年暮れWWWにホームページを開設して情報発信を開始した。本研究科では、特色ある国際開発教育研究の一つの柱として、情報システムの構築とその高度利用をうたってきたが、幸い大学当局の理解を得て情報化のための大型予算を付けていただき、このほど情報システムが完成した。大学当局に感謝するとともに、システム構築のために研究時間を犠牲にして懸命に努力してくださった関係教官に心からお礼を申し上げたい。

第二は、本研究科のもう一つの目玉である海外実地研修が軌道に乗り、また国内実地研修が昨年から本格的に開始されたことである。海外実地研修については、1992年に開始して以来、ゼロから研修プログラムを出発させ、基礎を築いてこられた長峯教授が昨年3月定年でご退官になり、



昨年4月からは、嘉数教授が主任としてプロジェクトを担当されることになった。この機会に、途上国のフィールド調査に多年のご経験を積まれた嘉数教授のもとで、このプロジェクトの新たな評価と改善策が検討されることになっている。揺籃期を過ぎた海外実地研修が、成長期を迎えて脱皮していくことを期待したい。また、国内実地研修については、若林、潮木教授らのご尽力によって、ようやく本格的に発足することができた。これらのプロジェクトは、今後、実践的な国際協力人材の育成に大きく貢献するであろう。

第三に、昨年、JICA、OECD、UNCRD、世界銀行など、多くの国際協力機関と本研究科との提携関係を強化できたことも特筆すべきであろう。長田助教授のご尽力によって他大学との間のAPECの研究ネットワークもできた。国際開発研究科にとって、国際協力機関との間の人材及び研究の交流の拡大強化は今後いっそう重要である。本研究科の研究水準を上げるためにも、また大学院卒業生の活動の場所を広げるためにも不可欠な条件だからである。

国際開発2年を迎えるに当たって、国際開発理論の新たなパラダイムの構築と国際協力にふさわしい人材育成にむけて、今後本研究科はより大きく前進していきたい。

# インターネット上に GSID ホームページを開設

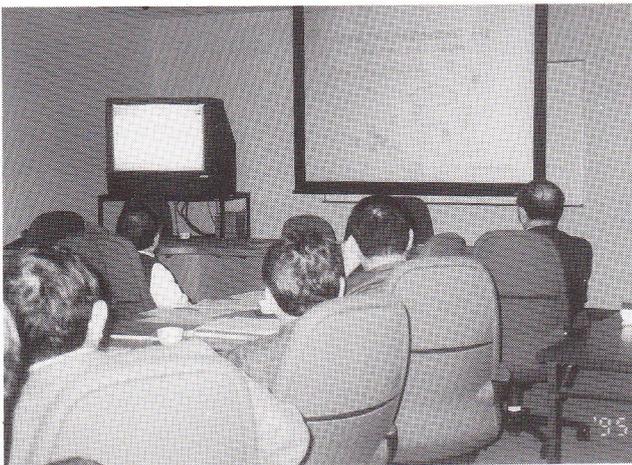
—http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp—

大学院国際開発研究科 (GSID) は平成7年12月20日、インターネット上に WWW (World Wide Web) のホームページを開設し、日本国内及び世界に向けての情報発信を開始しました。

GSID ではかねてより、全ての教官研究室と院生室へのコンピュータの設置とネットワーク化など、情報化時代への対応に力を入れてきました。WWW サーバーも平成6年春より試験的に運用してきましたが、今回これを公式運用に移したことで、GSID から広範な人々へのマルチメディア情報発信の基盤が整ったこととなります。

現在公開が進められている情報の概略は以下のとおりです。多くは各研究者 (グループ) や委員会の担当者が独自にまとめており、文章 (和文・英文) ばかりでなく絵や写真が効果的に織りまぜられています。

- GSID の紹介 :
  - ・GSID の設立の主旨, 組織, カリキュラム
  - ・スタッフの紹介 (研究課題, 主要著書, 論文)
- 施設サービス案内 :
  - ・留学生と留学希望者への助言やお知らせ
  - ・情報資料室利用案内
- 研究プロジェクト情報 :
  - ・GSID・APEC 研究センターの一連の研究プロジェクト
  - ・「アジアにおける健康と開発」シンポジウム (平成8年7月開催予定)
  - ・「開発の用語」データベース化プロジェクト
  - ・世界の国際開発関連情報
  - ・修士・博士論文要旨のデータベース化プロジェクト



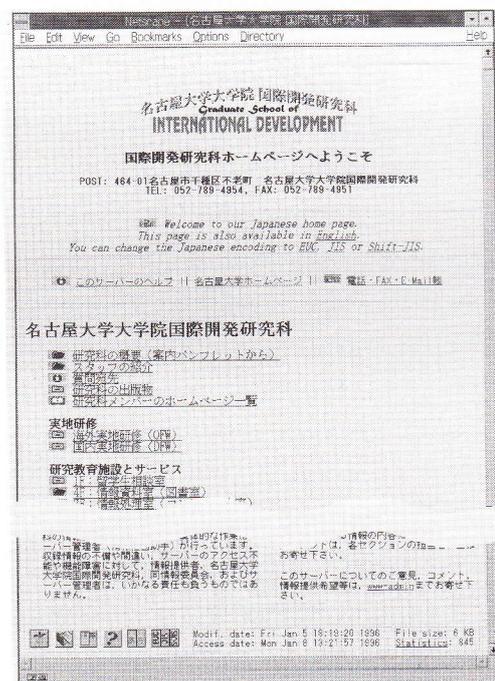
研究科委員会でのデモンストレーション

- 学会や個人のホームページ :
  - ・GSID メンバー有志の他にも、スタッフが事務局等を務めるいくつかの学会がホームページを開設
- アドレス帳 :
  - ・GSID の教官, 学生, 職員の電話, ファックス, 電子メールアドレスが検索できるデータベース

現在 WWW サーバーに使用している UNIX ワークステーションは、卓上型の最も小型の機種ですが、WWW サーバーの機能としては、和文と英文の自動選択 (日本国内の読者へは和文, 海外へは英文を最初に表示), 言語と日本語コードの切り替え機能, 検索機能 (アドレス帳), 担当者へのメール送付機能, アクセスカウンタなど多彩です。全て GNU ライセンスに基づく無料のソフトウェアや独自のプログラムを使用したため、低コストで WWW サーバーを実現することができました。

既に、WWW を通して GSID を知った留学希望者や国際開発関係の NGO からの問い合わせ、内容検索や掲示板機能の追加希望など、様々な反響が寄せられています。機能に関しては、ワークステーションの処理能力の壁はありますが、利用者の要望を徐々に実現するよう努めて行きます。

今後、より多くの GSID メンバーが情報発信に参加することによって、内容の充実と多様化が図られ、将来的には、GSID の広報システムから国際開発・協力・コミュニケーション分野の情報センターへと発展して行くのではないかと期待しています。日英以外の言語で GSID を紹介したという留学生有志の方々もおり、我々の WWW サーバーが多言語化する日もそう遠くはないかもしれません。



GSID のホームページ

## 活躍する院生

### 世界銀行からの報告

国際開発研究科 博士課程2年 梅村 哲夫

GSIDに入学したのは、以前の青年海外協力隊の経験から、途上国の開発という問題に真正面から取り組むためには幅広く系統だった知識と現地でのさらなる経験が必要であると痛感したからです。

GSIDでは学際的な開発問題を学ぶとともに、独自のカリキュラムである海外実地研修（OFW）にも参加、タイ農村部の経済開発問題に取り組み、理論を実践に適用する術を先生方の指導の下に学びました。前期課程修了後、後期課程に籍を置きつつ、昨年7月よりアメリカの首都、ワシントンD.C.にある世界銀行本部において経験を積む機会に恵まれ、現在、エコノミストとして国際経済局世界経済動向部で調査研究に携わっております。

世銀は、途上国に対する融資を主な業務としていますが、途上国の経済開発問題の調査研究とコンサルティングサービスも重要な業務に含まれます。

債務問題、貿易問題、一次産品問題などそれぞれ専門に扱う部門のある中で、私の職場はマクロの視点から世界経済の構造変化、先進国の経済動向が途上国経済に与える影響と将来の予測に関する調査研究を担当し、その研究成果は毎年発表される『Global Economic Prospects and the Developing Countries』にまとめられます。この報告書は『World Development Report』に次ぐ世銀の代表的な書物で、途上国の経済運営に携わる人達を対象に執筆されています。

世銀に来て気が付いたのは、構成する人種の多さです。ヨーロッパ系を筆頭に、アジア系、アフリカ系、中南米系と様々です。活躍する女性も多く、これらは日本の職場ではあまり目にする事は出来ないでしょう。また職場は能力、実務主義であり私のまわりは全員博士号所持という高

学歴集団なのですが、仕事に対する評価は学歴にかかわらず公正かつ平等であり、プレッシャーも感じますが良い成果を残すようにへん刺激されています。様々な部署のある中で、ここでは世界経済の動向をいち早く把握でき、また豊富にあるデータを使い自分で実証分析できるという醍醐味があることは大きなメリットです。

赴任して1年が経ち、途上国をマクロの視点でみるといったものが身に付いてきた気がします。今まで経験してきた草の根の活動とは対照的なこの視点は自分に欠けていたものであり、そういった意味でも世銀での経験は貴重なものとなっています。あと1年任期がありますが、途上国に貢献できるような研究成果をめざし、一層努力する所存です。

## 海外実地研修（OFW） の新たな展開に向けて

OFW委員長 教授 嘉 数 啓

平成4年に開始された海外実地研修（OFW）は、タイ（2回）、フィリピン（2回）が終了し、8～9年度はインドネシアで実施すべく鋭意事前準備をすすめている段階である。7年度のOFWはフィリピン大学ロスバニヨス校（UPLB）との学術協定に基づいて、ラグナ州を中心に、9月中旬から約1カ月の日程で実施された。GSID側から院生25名（内女性14名）、アドバイザー4名（教官・助手）が参加し、4つの分野（経済開発、社会開発、環境インフラ、行政・制度）でカウンターパートの協力を得て、バランガイ（村落）レベルでの調査を中心に開発にかかわる諸問題を洗い出し、総合的にその因果関係を分析し、その解決に向けての提案をグループ毎に報告、議論した。95' OFWは初期の目的を達成した。しかし、OFWがすべて英語でなされたこともあって、意見交換が必ずしも活発ではなく、また学生の自主的問題発見、論理的な問題解決能力学習という視点から多々問題もあり、今後改善に向けて一層の努力が必要である。



世界銀行のオフィスにて



山岳訓練センターでの研修風景

## 地域に根ざした 開発研究をめざして

—— 国内実地研修を実施 ——

大学院国際開発研究科では、学生に第三世界の実情をフィールドワークにより実際に体験させる海外実地研修を行っていますが、本年度から、新たに国内実地研修もカリキュラムの一貫として実施することになりました。

初めての国内実地研修の目的は、留学生に日本の事例を母国での諸問題への応用として学ぶ機会を提供し、また日本人学生には、自国での経験を海外での研究と対比させる機会を実地で体験させることにあります。

プログラムは、6人の教官による個別研修と全体研修から成っており、学校の見学及び企業からの聞き取り調査、また神社が地域に及ぼす影響調査や農業施設訪問等バラエティな構成となっています。

平成7年9月26日(火)から28日(木)まで実施された全体研修の目的は、愛知県幡豆郡一色町での地域おこしの現場を実地調査することにあります。一色町には、日本一を誇る生産物として、養殖鰻、カーネーション、エビ煎餅があり、また三河湾には佐久島を抱える等、日本における地域開発の事例を学ぶには格好のフィールドであります。

短期間ながら盛り沢山の調査日程をこなしてきましたが、参加者にとってこの研修は、実り大きなものとなり、その研究成果は、後日取りまとめられる予定となっています。



佐久島小中学校での交流会

## ご存知ですか？ APEC 研究センター

APEC 研究センター・日本コンソーシアムの一翼を担う機関として国際開発研究科に APEC 研究センターが設置されたことは、ニューズレターNo.1でお知らせした通りです。(組織と活動内容については、インターネットで国際開発研究科のホームページに接続して APEC 研究センターの項をご覧ください。)

センターでは、現在2つの研究プロジェクトが進行中です。第1はコンソーシアム参加の6国立大学による「APEC 地域の開発協力戦略に共同研究」(文部省大学院重点特別経費)で国際協力専攻と国際コミュニケーション専攻の6教官が幅広いテーマで研究中です。第2は「APEC の経済政策」(アジア経済研究所からの受託研究)で国際開発専攻の5教官が参加しています。その研究成果は平成8年3月にディスカッションペーパーやインターネットで公表される予定です。

研究が進むにつれ、他の APEC 研究センターとの研究交流も活発化しています。平成7年9月には、コンソーシアム参加機関のアジア経済研究所に各国の APEC 研究センターの研究者が集まり、貿易・投資の自由化をテーマに国際シンポジウムが開催されました。同時に、文部省と日本コンソーシアム共催の各国 APEC 研究センター代表者による国際会議ではインターネットによる研究交流計画が具体化しました。

また、APEC 大阪会議を控えた平成7年10月28・29日には、日本コンソーシアムの第1回研究集会「APEC 研究センター神戸会議」が神戸大学のホストにより、神戸国際会議場において一般公開で開催されました。国際開発研究科からは、嘉数教授が「APEC 地域における農業環境の変化と穀物需給の将来展望」、長田助教授が「インドネシアの貿易・資本自由化と APEC」について報告しました。

平成8年3月にはアジア経済研究所主催の研究集会が、また9月頃には日本コンソーシアムの第2回研究集会が本学国際開発研究科において開催される予定となっています。

## 留学生相談室から

留学生担当講師 吉岡 美千子

大学院国際開発研究科に、留学生相談室が開設されたのは今からちょうど2年半前です。開設当初は、待てど暮らせど留学生がやってこないという日々が数日続き、心配になって他学部の留学生担当教官に「誰も相談に来てくれない」と相談したり、また「何の部屋だろう??」とたまたま立ち寄ってくれた留学生にはお茶を勧めて引き留めたりしていたことを懐かしく思い出します。今思うとそれは夏休みで来室者が少なっただけで、新学期が始まるとともにその数は増え、今では1日に少なくとも5～6名の来室者があります。

本研究科には現在95名の留学生が在籍し、相談室を訪れる目的は履修科目の相談や日本語に関する質問であったり、入国管理局の手続きや宿舎あるいはアルバイトに関する情報を得るためであったり、あるいは人間関係や将来に関する悩み相談であったりと実に様々です。特に新入生については入学後しばらくは、毎日相談室に顔を出すこともめずらしくないのですが、1ヶ月、2ヶ月と経つうちにだんだん来室する回数が減り、それによって彼らが本研究科の生活に慣れたことを知りうれしく思うと共に、留学生の「母」としては少し寂しくも感じます。

留学生の相談の中で指導教官に関する相談が時折あります。私が知る限りでは、本研究科教官は日本人同様留学生に対しても熱心で親切な指導をしており、現に留学生からの教官の研究指導に対する不満はこれまでほとんど聞いたことがありません。それでは、どのような相談があるかと

いうと、「指導教官がこわい」という相談が少なくないのです。「こわいって、一体どこがこわいの?」と聞くと明確に指摘できる留学生はほとんど無く、ただ先生の前に出ると極度に緊張し、日本語で話す場合には日本語がおかしくなったり、英語で話すにしても話の内容が支離滅裂になってしまうというのです。

日本の場合、指導教官と学生はまさに「師弟関係」であることが多いようですが、国によっては指導教官と学生の関係が「師と弟子」というよりは「先輩と後輩」あるいは、もっと気さくな関係である場合もあるようで、そのような国からやってきた留学生の中に「指導教官に話したいことがあるが、こわくて話せない。」という悩みが多いようです。「あの先生のどこがこわいのだろう?」と不思議に思うことがほとんどですが、かつて私が学生だった頃、やはり指導教官の研究室を訪ねる時は、ドアの前で大きく深呼吸をしてからノックをしたことを思い出すと、彼らの気持ちがわかるような気がします。私の場合は、ある事件がきっかけで指導教官に相談せざるをえなくなり、とことん話した結果、先生を恐れる気持ちがいつの間にか消えてしまいましたが、留学生の場合も同じようにちょっとした出来事がきっかけで、先生と腹を割って話し、恐れる気持ちが消えていくようです。ですから、今これと言った理由もなく指導教官をこわいと感じている留学生の方は、どうぞご安心ください。いつか恐れる気持ちは消えてしまいますから。そして、「何でこの学生は私の前でビクビクしているのだろうか?」と、あるいは「何ではっきり意見が言えないのだろうか?」と不思議に思っている先生方、このようなこともあることを心に留めて留学生に接してください。



吉岡講師（右端）と留学生の皆さん

## 客員研究員の紹介

GSID では昨年10月から新しい客員研究員を迎えましたので紹介します。

[外国人研究員]

柳 庸圭 (ユウ ヨンギュ) : 大韓民国



仁川大学校人文大学助教授  
研究課題「日韓両語の漢語系用語に関する対照研究」  
期間 平成7年10月1日  
～平成8年3月31日

袁 振国 (ヤン シェングオ) : 中華人民共和国



華東師範大学教育学部助教授  
研究課題「中国における教育改革の現状と課題－日中教育比較研究を通じて－」  
期間 平成7年10月1日  
～平成8年3月31日

[国内研究員]

大野 昭彦 大阪市立大学助教授

研究課題「アジアの工業化と労働」  
期間 平成7年10月1日～平成8年3月31日

井澤 直也 社会調査研究所主任研究員

研究課題「途上国における職業教育と雇用開発」  
期間 平成7年10月1日～平成8年3月31日

## 出版物案内

### 最新 国際開発研究科発行の印刷物

国際開発研究フォーラムNo. 3  
海外実地研修－その基本理念と手法について－  
国際開発研究科外部評価懇話会報告書

### 近日発行予定の印刷物

フィリピンカビテ地区における開発事例  
海外実地研修レポート  
国際開発研究フォーラムNo. 4  
自己評価報告書 (第2回)

## 平成7年諸外国からの来訪者

- H 7. 4.18 アランソンゼーマッコリー大学副総長外2名 (オーストラリア)  
学術交流協定締結のため
- H 7. 5.16 李徳煥華中理工大学副校外2名 (中国)  
研究施設見学のため
- H 7. 6. 2 I A T S S フォーラム研修生18名 (アセアン各国)  
研究施設見学のため
- H 7. 6.19 スカントレクソディプロジョガジャマダ大学長外2名 (インドネシア)  
学術交流協定締結及び講演のため
- H 7. 9. 8 アラグジャワハルラル・ネルー大学副学長 (インド)  
学術交流の推進及び研究施設見学のため
- H 7. 9.21 黄耀文上海市人事局長外19名 (中国)  
公務員制度についての研修及び視察のため
- H 7.10.30 バーデンビュルテンベク州トロータ学術・研究大臣外6名 (ドイツ)  
研究施設見学のため
- H 7.11.13 ヌールファド財務省教育研修所長外2名 (インドネシア)  
インドネシア政府派遣留学生等と懇談のため
- H 7.11.14 張柏鑑広東省人民政府研究中心主任外18名 (中国)  
教育組織運営についての研修のため
- H 7.11.17 グエン・ディン・ロック司法大臣外1名 (ベトナム)  
司法制度の現状視察及び研究施設見学のため

## スタッフの人事異動

[教官]

H 7.12. 1 昇任 吉岡美千子 講師 (留学生担当)  
(留学生担当助手から)

[事務官]

H 7.10. 1 配置換 加藤 武夫 前事務室長  
(事務局経理課課長補佐へ)  
〃 宮木 義夫 事務室長  
(事務局主計課から)